

Title	河上肇記念会から (河上肇記念講演会)
Author(s)	中野, 一新
Citation	経済論叢 (2005), 176(5-6): 583-587
Issue Date	2005-12
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/66343">http://dx.doi.org/10.14989/66343</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

なって、その後ということで私が代表を、要請はされているんですが固辞している際中でありますので、代行ということにさせていただきました。昨日山口県から京都に参りまして、今朝大変晴れておりましたので東山の法然院の河上先生と奥さんの秀さんのお墓にお参りをして、このシンポジウムと講演に参加をさせていただきました。

皆さんもご存じの通り、河上肇は現在岩国市となっておりますが山口県玖珂郡錦見村で1879年（明治12年）に生まれ、旧制の山口高等学校を卒業するまで19歳か20歳の時まで山口県で生活をしました。そういうこともあって私たちは河上肇先生の郷里ということで記念会を作ってそれなりの活動を進めているところです。メッセージにも書きましたけれども、私たちが非常に印象深く学ばせてもらっている著作に「貧乏物語」があります。いかにして貧乏を根治すべきか、克服すべきかというテーマは、依然として今も解決されていない大きなテーマだと私たちは考えています。ぜひ河上先生のご努力に学びながら、私たちが跡を継いで頑張っていきたいという気持ちで、山口県でも頑張っていることをご報告したいと思います。

やがて春になりますが、錦帯橋という岩国市の有名な橋がついに先だって新しくたちかわりましたが、その錦帯橋の橋のたもとに河上先生の歌碑を河上会が建立しました。今日法然院に行きましたら、お墓の隣にも同じ歌がありました。「たどりつき ふりかえりみれば山川を こえてはこえて きつるものかな」という歌が彫られています。ぜひ岩国にもお出でいただいて、河上肇先生を偲んでいただきたいということを申し上げましてご挨拶に代えたいと思います。本日は大変ありがとうございました。

#### 河上肇記念会から

中 野 一 新

ご紹介いただきました中野でございます。河上肇記念会の世話人代表を務

めさせていただいております。ご承知の方も多いと思いますが、河上肇先生は、終戦の翌年1946年1月30日にお亡くなりになりましたので、今年は先生が亡くなられてちょうど60年目の年にあたります。この記念すべき年に、京都大学経済学部が河上肇記念シンポジウムと講演の夕べを催してくださったことを大変ありがたく感謝しております。まず始めに、河上肇記念会を代表して心からお礼を申し上げます。

私どもの河上肇記念会は、先生の人と思想に私淑する人たちが集う組織で、全国各地に約500名の会員がおります。今から30年ほど前の1973年にこの記念会が発足し、現在に至っております。最初の世話人代表は当時の立命館大学総長で、河上先生の義弟にもあたられる末川博先生がお引き受けくださいました。お二人目の世話人代表は、この後ご講演いただく住谷先生のお父さまである住谷悦治先生に御就任いただきました。河上肇記念会では毎年10月に河上肇先生御夫妻のお墓がある法然院で法事と総会を催しております。また、河上肇記念会会報を年に3回刊行して、会員間の交流を深めております。なお、今年は先生がお亡くなりになられて60年目という特別の年でありますので、例年の催しとは別に、市民と学生の皆さんを対象にした記念講演会をこの10月に開催しようと計画しております。京都大学の文学部出身で、皆さんよくご存じのニュースキャスター、鳥越俊太郎さんをお招きして、河上肇先生が沈黙を余儀なくされた、先生の最晩年の時代の言論界の状況と、右傾化の甚だしい昨今の言論界の実情とを重ね合わせたお話をじっくり聞かせていただけたらと、今から期待をしております。

本題に入りますが、本日の進行役をお務めの八木先生から、「河上肇と京都大学」というテーマをいただきました。河上先生は、1908年（明治41年）8月、29歳の折りに京都帝国大学に着任され、1928年（昭和3年）4月、49歳のときに京都大学を辞職されますから、京大での在職期間はちょうど20年ということになります。この20年の間には、1910年の日韓併合、同年の大逆事件、1914年からの第一次世界大戦、1917年のロシア革命、翌18年の米騒動、1926年には河

上先生とも深くかわりのある京都学連事件等々、歴史に残るさまざまな事件が相次いで起きており、まさに疾風怒濤の時代であったと呼んでいいと思います。この京大在職時代に河上先生は、マルクス主義経済学の本格的研究に着手し、研究成果を次ぎ次ぎと公表されていかれるわけですが、その経緯や内容については、この後住谷先生がご講演の中で詳しくお触れになると思いますので、私は次の2つの点にしばってお話させていただきます。いまから触れる河上先生にまつわる2つの点こそは、当時の知識人たち、とりわけ旧制高校や大学の学生たちを魅了し、彼らに多大な影響を及ぼしたと考えるからであります。

ひとつは河上先生が貧困、貧しさの問題に真正面から挑戦され、世界中から貧困を追放するシナリオ、処方箋を模索する中で、マルクス主義経済学に接近されていった点であります。ご承知のように、当時の旧制高校や大学の学生たちの多くは、農村の地主や素封家たちの子弟であったり、あるいは都市部の資本家や名望家たちの子弟でしたが、彼らは日本資本主義の発展とともに頻発しだした貧困に端を発する小作争議や労働争議、さらには相次ぐ公害問題の発生などを眼前にして、若者に特有の社会的正義感も手伝って、河上先生が提示される貧困問題に注目していきます。1916年に大阪朝日新聞に連載され、翌1917年、ロシア革命の年に刊行された『貧乏物語』が一斉を風靡したのもその現れにほかなりません。時あたかも、大正デモクラシーの時代に突入し、トルストイやドストエフスキーといったロシア・リアリズムのヒューマニティに富む小説が若者たちによって愛読された時代であり、学生たちは自らの恵まれた境遇、あるいは実社会に出てから己が進むべき道を考えるとき、貧困問題に目をつぶって歩むことに胸の痛みを感じざるを得ない時代状況に立たされておりました。そういうときだからこそ、河上先生の果敢な貧困分析は彼らの心にフィットしたのだと思います。いまひとつは、河上先生の思想的誠実さが当時の学生たちの心をとらえて放さなかった点であります。時代が投げかける課題について、それを避けることなく受け止め、全力を投入して考え抜き、自分の考えが誤っていると気付けばちゅうちょなく改める、この真理探究の情熱と姿勢、思

思想家としての誠実さ、言い換えれば、自分に正直に生きることに徹する河上肇の人間としての魅力に、多くの若者たちは心を打たれ、引き込まれていったのだと思います。

明治末期から昭和の初めまでの20年間、京都大学に籍を置き、常に思想界、言論界の最前線で、時代と深くかかわりながら一大論陣を張ってこられた河上先生は、1928年に京都大学を追われ、まもなく実践活動に入られます。そして、5年後の1933年には治安維持法違反で検挙されます。先生は下獄中はもとより、出獄後も閉戸閑人と号して、沈黙をよぎなくされたまま最晩年を過ごされることとなりますが、先生の研究者としての使命感、思想家としての誠実さに私淑する学生たちの気持ちは、“河上精神の継承”というスローガンとともに戦後の学生たちに引き継がれていきます。河上先生が亡くなられた翌年、1947年から京大経済学部の学生たちが中心になって、毎年、学生河上祭が開催されるようになり、戦後の学生たちも、先生の思想や行動について繰り返し学んでいくこととなります。この学生河上祭は、大学紛争後まもない時期、1970年代中ごろまで続きます。安保闘争のさなかの1960年に京都大学に入学した私も、学生河上祭の実行委員会に加わって、講師の依頼やパンフレットの作成、講演会場の確保、カンパ集め、広告取り、河上まんじゅうの発注に奔走しました。また、こうした準備作業の傍ら、河上先生の自叙伝や『貧乏物語』の読書会を催して、侃侃諤諤の論を戦わせたことを昨日のことに覚えています。その当時は河上先生の警咳に接せられた先生方が多数ご存命でしたので、そうした先生方が講義やゼミナールの中で、エピソードを交えて紹介される河上肇像にも、私ども学生たちは胸をときめかせたものです。

ところが、学生河上祭が途絶え、河上先生に直接接せられた先生方からお話を伺う機会が少なくなるにつれて、若者たちにとって河上先生は遠い存在となり、現在に至っております。この現状を少しでも打開したいというのが、先生の思想や生き方から多大な影響を受けた私どもの世代の率直な気持ちであります。もとより、現代世界のフレームワークは、河上先生が生きてこられた時代

とはすっかり変わってしまいましたけれども、今また非常に緊迫した時代が到来しつつあります。このときに、若い人たちに河上先生のご思想、河上先生の生き方をどのように伝えていくのかということが、河上肇記念会にとっても大変大事な課題になっているということを申し述べて、私の話を結ばさせていただきます。どうもありがとうございました。